ギリシア古代都市メッセネにおける劇場のローマ時代客席部の 現状報告と復元試案

DESCRIPTION AND TENTATIVE RECONSTRUCTION OF THE ROMAN CAVEA OF THE THEATER IN ANCIENT MESSENE

岩田千穂*, 伊藤重剛**

Chiho IWATA and Juko ITO

Ancient Messene, Greece, was founded by Epaminondas in 369 B.C. Kumamoto University Architectural Mission to Greece has surveyed, since 2007, the architectural remains of the theater including more than a hundred blocks from walls, columns, etc., in order to reconstruct its form of Roman period. The authors analyzed remains and blocks in detail and tried to reconstruct the cavea in the last phase from the 1st to 3rd century A.D. We have reached conclusion that the cavea was separated in 3 parts with 2 diazoma. The lower and middle cavea were separated into 11 and the upper cavea into 16.

Keywords: Ancient Greece, Roman era, Messene, Theater, Cavea, Reconstruction
古代ギリシア, ローマ時代, メッセネ, 劇場, 客席, 復元

1. 序論

1-1. 研究背景

ギリシアのペロポネソス半島南西部にある古代都市メッセネは、紀元前 369 年にエパミノンダスにより建設された都市である¹⁾。全長約 9m の市壁に囲まれた都市内のゆるやかな傾斜地に主要な公共施設が建設され、都市の中心部となっている。劇場は、アゴラの北西隅から約 34m 西にあり、自然の斜面を利用して作られている。

メッセネ考古学協会(会長:元クレタ大学教授、P. テメリス氏)による劇場発掘は、1990 年台に開始され、発掘がひと段落した 2010 年以降は、現場での修復作業がおこなわれている²⁾。

筆者ら熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長:伊藤重剛)は、2007 年から 2012 年にかけて、建築班として当該劇場の建築調査をおこなっている。調査団の調査目的は、劇場の建築学的研究をおこなうことであり、具体的な調査内容は、劇場の建築遺構や建築部材の実測、写真撮影、そして詳細な観察記録をとることである³⁾。

1-2. 既往研究および本研究の目的と位置づけ

紙面の都合上、ギリシア劇場の既往研究に関しては詳述しないが、個別の劇場の復元研究は各遺跡の発掘報告に見られる。一例として、ギリシアで最も保存状態のよいエピダウロスの劇場に関する文献が挙げられる⁴⁾。

本稿の目的は、現地調査の成果から劇場の客席部の現状報告をおこない、調査成果をもとにローマ時代の最終段階の客席部⁵⁾の復元を試みることである。テメリス氏は、劇場は、前 3 世紀ごろに最初

の建物が建設され、後 2 世紀ごろにローマ劇場に改築、後 3 世紀ごろまでにオルケストラがアレナに改変され、後 4 世紀ごろに都市の衰退とともに放棄されたと推定している。また、西パロドスの壁は、ローマ時代の舞台建物が建てられた際、これに平行になるよう改変されたとしている⁶⁾。ただし、ローマ時代の舞台建物は、後 1 世紀に建設されたことが吉武氏により明らかになっている⁷⁾ため、劇場全体が後 1 世紀以降にローマ劇場に改変されたと考える。本稿では、後 1 世紀から後 3 世紀にかけての、ローマ劇場としての最終段階の客席部の復元を試みる。

著者らと吉武氏は、これまでに本劇場のローマ時代の舞台建物の復元案を提案している⁸⁾。客席部については、2011 年に同調査隊による復元案を発表した⁹⁾。この時提示した復元案の問題点は、2 本の周回通路により 3 層に分かれる客席の全層が同じ勾配で作られたことを前提に復元をおこなったため、客席の復元勾配と階段通路の遺構、パロドスの壁および笠木部材の勾配との間に矛盾が生じている点である。本稿では、この点を解決するために、各層での客席勾配が異なる可能性もあるとして、遺構や出土部材から得られた実測データを元に客席勾配を再考し、復元を試みるものである。

本論では、第 2 章で劇場建物全体の概要と現状を述べ、第 3 章で客席部の遺構の現状を、第 4 章で客席に関連する出土部材の現状を述べる。第 5 章にて、遺構と建築部材の分析をもとに客席全体の復元を試みる。第 6 章で結論を述べる。

* 熊本大学大学院自然科学研究科 大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, M. Eng.

** 熊本大学大学院自然科学研究科 教授・博士(工学)

Prof., Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, Dr. Eng.

写真1 劇場鳥瞰写真（メッセネ考古学協会提供）

図1 劇場の出土状況図（メッセネ考古学協会作成）

2. 劇場遺構の現状（写真1、図1、2）

劇場は、南北約90m、東西約100mで、客席が南向きに造られており、その周囲は幅約2mの石積みの後壁で支えられている。客席の南側は、東西パロドスの壁により支えられている。

客席の南側には、東西46.6m、南北15mの後1世紀に建設されたと考えられるローマ時代の舞台建物遺構がある。舞台背景となっていたスカエナエ・フロンスには3つのニッチがあり、それぞれのニッチ背後にはポストスケニオンへの出入口がある。舞台袖にも出入口があり、ポストスケニオンと通路でつながっている。

舞台建物の東には、可動式の木造舞台背景を収納するための舞台収納庫と思われる遺構が出土している。遺構の西端から東側の壁までの長さが27.55m、幅が8.13mである。この中に、溝が付けられた石材がレール状に並べられた遺構が、東西に平行に3本出土した。現在では、遺構の北側と東側の壁のみ残っている。この遺構は、ローマ時代の舞台建物が建設される以前に使用されていたものということが、両遺構の切りあい関係から判明している。

一般に、ギリシア劇場は客席と舞台建物とは構造的に分離して建てられ、基本的に半円形より大きな扇形の客席と円形のオルケストラをもつ。これに対しローマ劇場は、客席と舞台建物とが構造的に一体となり、客席やオルケストラは半円形である。また、ローマ劇場の舞台背景となる部分は、列柱が立ち並ぶ壮麗なものであった。当該劇場遺構には、ギリシア、ローマ劇場双方の特徴をみることができることから、ギリシア劇場からローマ劇場へ計画変更がおこなわれ、詳しい年代は不明確であるが、少なくとも3段階の建築段階があったということがわかる。第1段階は、ギリシア劇場として創建した段階、第2段階は舞台収納庫が建設された段階、第3段階は後1世紀以降、ローマ劇場へ計画変更がおこなわれた段階である。また、パロドスの壁の石積みが数種類あることから、前述の3段階に加えさらに1段階あった可能性もある。

3. 劇場客席部各部の現状

3-1. オルケストラ（写真2）

オルケストラは、円の4分の1を舞台建物が切り取る形になっている。オルケストラの直径は、幅約0.5mのエウリポスと呼ばれる側溝の内側に並べられた縁石の内側で21.6m、エウリポスまで含め

ると23.6mである。エウリポスはポロス材（茶色のやわらかくて粗い石灰岩）を並べて作られている。エウリポスの内側に並ぶ縁石は幅0.4~0.5m程度の矩形の石材で、数mおきに10m角の穴が開いた正方形の石材が配置されている。また、エウリポスの内側の縁石上に彫刻の台座が置かれている部分が4箇所あり、エウリポスの外縁に沿って置かれている部分が1箇所ある。階段通路がある位置には、エウリポスの上に板石が置かれ、オルケストラから階段通路へ出入りできるようになっている。また、階段状通路のない部分でも何箇所か同じような板石が置かれ、その上に貴賓席が置かれている箇所が2箇所ある。ただし、彫刻の台座や貴賓席が原位置を保っているかは不明である。

オルケストラの床面には、ローマ時代になってから舗装されたと考えられる赤、白、灰などの約0.2m角の四角い大理石板が並べられているのが部分的に残っている¹⁰⁾。これらの大理石板の中には、アーチ形の建築部材を再加工した板石も含まれている。オルケストラ北東部には、2枚の大理石板を立てて脚とし、その上に1枚の大理石板を水平に載せた祭壇の跡がある。

3-2. 客席

客席自体は、ほとんど崩壊した状態で出土したが、劇場東西後壁やオルケストラにより客席の範囲はおおまかに判明している（図1）。客席があったと思われる斜面の北中腹で、0.1~0.2m角の粗石が積まれた状態で発見された。これは、客席の基礎の一部と考えられる。

また、座席の最下段から2、3段程度、部分的に座席が残っている（写真3）。最下段の座席は、エウリポスの外縁に接するように置かれたポロス材の座席である。座席2段目以降は、石灰岩製の薄い板材を水平と垂直に配置して座席を構成している。現在積み残されている座席の一部は、発掘者により修復されたものである。

3-3. 階段通路

階段通路は、最下段の数段分のみ残っており、発掘時にはややゆるんだ状態で出土したが、現在は修復され整えられている。階段通路は合計10本あり、客席の最下層は11クネイに分割されていたことがわかる。また、パロドスの壁に沿った階段通路は作られていない。階段の各部寸法は、幅が約0.72m、踏み面は最小0.290m、最大0.460m、蹴上は最小0.097m、最大0.220mである。

通常、各階段通路の延長線はオルケストラの中心点に一致する。

図2 劇場全体の現状平面図

本劇場の場合、10本の階段のうち、その延長線がオルケストラの中心点にほぼ一致するのが東から8本の階段で、残る西から2本の階段の延長線は、オルケストラの中心点に一致せず、舞台建物のプロスカエニウム・ウォールの西半円形ニッチ付近へ収束する¹¹⁾。

3-4. 周回通路

周回通路は、客席に沿って作られる円弧形の水平通路である。現状でその痕跡がほとんど残っていないが、その痕跡と考えられるものが、3箇所を確認される。1箇所目は、劇場が出土した斜面の西中腹に出土しているポロス材と石灰岩の列である。これらは、長さ約2mに渡って出土しており、石灰岩材列の上にポロス材列が載るかたちとなっている。2箇所目は、西パロドスの壁の一部がオルケストラ中心から約31.8mの地点で切れ、石灰岩製石材で舗装された床のようなものが見えている部分である。3箇所目は、東後壁の南端部に設けられている斜路とその曲がり角と思われる部分である。

3-5. パロドスの壁

客席と舞台建物との間は、役者や観客が通るパロドスという通路となり、客席側の壁は、客席を支える壁となる。メッセネの劇場のパロドスの壁は劇場の東西で出土しており、少なくとも2度の改変の痕跡が見られる。

西パロドスの壁は、舞台建物の壁とほぼ平行だが、オルケストラから西へ約20mの地点で、下部のみが外側へ7度折れ曲がり突出しており、上部のみ舞台建物と平行になるよう石材が積まれている(図2左下、写真4)。おそらく、壁の建設途中あるいは建設後に、舞台建物と平行になるように上部のみ積み直したのだろう。壁東部は舞台建物と平行で、L字型に整形した石灰岩材を精緻に積んで構成されているが、壁西部では矩形の石灰岩材のみを整層積みにして構成されている(図3左)。また、3本のバットレスが約3.1mおきに作られている。壁西部では、下部がポロス材と一部石灰岩で構成され

写真2 オルケストラを南東より見る

写真3 オルケストラのエウリポスと客席1~3段目

写真4 西パロドス西部の壁下部のみが外へ折れ曲がる部分

写真5 東後壁全体を南東より見る

ており、壁東部では、石灰岩材列の内側にポロス材列がある。

一方、東パロドスの壁は、舞台建物の壁と平行でなく5.5度角度をなしている(図2右下)。壁は、全長約41mで、エウリポスの縁石の位置から劇場東端部まで続いている。壁西部では、長さ0.9~1.2m厚さ高さともに0.4~0.6mのポロス材を整層積みにした石積みが発見されたが、上部全体が地震などで一度に崩れたようで、横倒しの状態で発見された。壁東部では、ポロス材列の上部に石灰岩

が載っている。また、東パロドスの壁東端部には、東側外部からの出入り口があり、石灰岩の板石で舗装された斜路がある。この斜路の北側に全長約 16m の石灰岩材による壁が作られている（図 4 左下）。東パロドスの壁のすぐ南側には、石灰岩を積んだ可動式舞台収納庫の北壁が 26.5m にわたって残っており、パロドスの壁との間には、石材が詰められている。この壁は、舞台建物に対して 5.5 度角度がついているポロス材の壁よりも後に作られたと考えられる。

3-6. 客席後壁と外部階段（図 4）

東西後壁は、客席部の外縁を支える厚さ約 2m の重厚な壁で、現在までに劇場西部で長さ約 60m、東部で長さ約 50m にわたり発掘されている（写真 5）が、北部に未発掘の部分が 40m ほどある。壁が最も高い位置まで残っているのは、西後壁の一部で、壁外側の地表面からの最高高さ約 5m である。後壁の平面形は、西後壁と東後壁北部が放物線状の形、東後壁南部が円弧をなすような形となっている。西後壁は、ルスティカ仕上げの石灰岩を積んで構成されている。一方、東後壁の石積み中使用された石材の仕上げは、西後壁の石材と比べて石材表面の突出が少ない。東後壁の北方では、壁の最下部に碎石を積み、その上に石灰岩材、さらにその上にポロス材を積んで壁を構成しており、東後壁南方の石積みと構成が異なる（図 4 右下）。また、東後壁南部には、3～4m おきにバットレスが付けられている。後壁各部の石材の仕上げと壁の構成から、少なくとも 1 度改変された可能性が示唆される。

両後壁のすぐ外側には、板石で舗装された傾斜路がある。西後壁では、排水溝の上に板石で蓋をし、幅約 2m の通路となっている。東後壁の外側は、劇場とその東に隣接するアルシノエの泉との間を通りアゴラへ抜ける都市内の主要な街路となっており、一部板石の舗装が残っている。これらの街路から客席へ出入りするための階段が、西後壁に 4 本、東後壁に 3 本の階段が設けられている。これらのうち、西後壁の西北端に設けられた階段は、幅約 2.6m 長さ約 9.9m の大階段であり、劇場北側からの主要な出入口であったと考えられ

る。この階段を、北大階段とする。西後壁には、このほかに幅約 1.3m の階段が 3 本設けられている。これらを、北から順に西側北階段、西側中階段、西側南階段とする。各階段間の距離は、内法で約 15～20m である。南階段と中階段の上部には持ち送りアーチが残っており、階段上部に屋根が架かっていたことをうかがえる。東後壁に設けられた 3 本の階段を、北から順に東側北階段、東側中階段、東側南階段とする。東側北階段、東側中階段は、数段残っているが、東側南階段はその痕跡のみが発見されている。

後壁とパロドスの壁とが交わる劇場東西南端付近には、南側外部から出入りするための大階段が残っている。これらを南西大階段、南東大階段とする。南西大階段は、幅約 5.5m にわたって石材が並べられており、階段の踏み面は約 0.7m であった。

4. 客席の建築部材

4-1. 座席部材

メッセネの劇場で使用された座席は、材料および工法の点で 3 種類あることを確認した。

第一に、高さ 0.41m 座面幅 0.399m のポロス材からなる座席である。この種の座席は、3 種の座席部材の中では最も古いものだと考えられる。客席最下段の 1 段のみに使用されている。全体的に残りが悪いが、これらのうち比較的残りがよい部材 1 個を実測したところ、部材高さ 0.410m、底面幅 0.302m、座面幅 0.399m であった。

第二に、石灰岩製の板石を垂直と水平に組み合わせた座席であり、ディルケ氏による分類ではアルゴス型にあたる¹²⁾。遺構の現状より、客席の 2 段目から数段は、この種の座席が使用されたことがわかる。水平に設置された板材は座面用と足置き用の 2 種類があり、客席の南西から 2 番目のクネイに残る座席 2 段を実測したところ、座面用の部材は厚さ 0.14m、奥行き 0.35～0.36m、足置き用の部材は厚さ不明、奥行き 0.37～0.38m、垂直に設置された板材は足置き用部材上面から高さ約 0.25m であった。座面用の部材は、設置する際に垂

図 3 西パロドスおよび東舞台収納庫の壁の南立面図

図 4 東西後壁および東パロドス上部壁の立面図

図5 座席部材

(ア) 左端座席部材 (No. 1020) (イ) 中間座席部材 (No. 1013)
(ウ) 右端座席部材 (No. 1038)

図6 東パロドスの壁部材

図7 パロドスの壁の笠木部材

直に置かれた石材の前面より 20 ～ 40mm ほど出るように配置されている。劇場遺構から出土した石灰岩製板材の多くは、現在別所にて保管されているが、2012 年度の現地調査時にこれらの石灰岩製板材の観察をおこなったところ、後述する高さ座面幅ともに 0.35m の石灰岩製部材の前面につけられている帯装飾や、背面および底面のこぶ状になっている粗仕上げ部分の痕跡があるものが多数発見された。これらのことから、この種の板材には、後述する石灰岩部材を再加工したものが含まれており、3 種の座席の中で最も新しいものである可能性が高い。

第三に、高さ座面幅ともに 0.35m 程度の石灰岩製部材である (図 5)。この種の部材は 536 個確認され、このうち 6 個の実測図を作成し、残り 530 個の各部寸法を計測した。座面を構成する石灰岩部材は、前面と上面を上仕上げとしているが、背面と底面をこぶ状の粗仕上げとしている。座面部材前面の高さは平均 0.358m (最小 0.294m 最大 0.419m) で、上面幅は平均 0.350m (最小 0.296m 最大 0.410m) である。部材前面につけられた帯の形から、それらが置かれていた位置を推定することができる。発見された 536 部材のうち、座席をオルケストラから見たときに右端におかれたと考えられる部材は 112 個、中間に置かれたと考えられる部材は 133 個、左端におかれたと考えられる部材は 98 個、残り 193 個は不明であった。帯装飾の幅は平均 0.131m で、部材前面から平均 0.022m 出ている。これと同じ形状の座席部材が、同じメッセネのスタディオンとエクレスティアステリオンでも使用されており、おそらくこれらと同様に前述の石灰岩部材で座面を構成し、石灰岩製の板材を用いて足置きを構成したと考えられる¹³⁾。この種の座席は、ディルケ氏の分類によるとメガロポリス型にあたる。

4-2. パロドスの壁部材

パロドスの壁は、ポロス材あるいは石灰岩の部材で構成されている。壁の最上段に置かれた部材は、上面が地面に対して斜めに切断されており、著者らはこれらのうち状態のよいもの 2 個の実測をおこなった。一方は東パロドスから出土したポロス材の部材であり、

上面の傾斜は 22.1 度である (図 6)。もう一方は、西側のパロドスの壁のオルケストラ近くに置かれた状態の部材であり、石灰岩製で、上面の傾斜は 21.1 度である。

4-3. パロドスの壁の笠木部材 (図 7)

パロドスの壁の上には、通常笠木部材が置かれる。メッセネの劇場では、石灰岩製の笠木部材が発見されている。著者らは、7 個の笠木部材を実測した。部材の長さは 0.78 ～ 1.3m、高さは 0.19 ～ 0.23m である。部材上面両側を面取りしており、7 個のうち 5 個のみ実測が可能であったため計測したところ、部材両端の接合面は底面に対して平均 21.35 度 (最小 19.12 度最大 22.90 度) 斜めに切られている。この角度は客席の勾配に合わせており、本部材をパロドスの壁の上に置いた際には、接合面が地面と垂直になったと考えられる。

5. 客席部の推定復元

本章では、現地調査で得られた遺構と建築部材の情報をもとに、以下の手順で劇場客席部の復元を試みる。まず、周回通路の本数とおおまかな位置を出し、客席の層数を求める。次に、座席や階段通路の勾配、各部寸法の復元値を算出し、その結果をもとに客席部の復元をおこなう。なお、高さについては、現地にてトータルステーションを用いて計測した標高をもとに、オルケストラの床面を高さ 0m とした時の比高を記す。ただし、現状図中には標高を記す。

5-1. 客席の層数

本節では、遺構の現状から周回通路の数を明らかにし、客席が何層構成であったかを考える。

現在、周回通路は残っていないが、その痕跡と思われる遺構が 3 箇所確認される。1 箇所目は、客席西中腹に出土した石材列である。この石材列は、石灰岩材列の上にポロス材列が載るかたちとなっており、石灰岩材列上面は高さ 9.037m、オルケストラ中心から石材列前面までの水平距離は 33.540m である。ポロス材列は、周回通路の基礎であった可能性が示唆される。2 箇所目は、オルケストラ中心から 31.758m の地点で幅約 35.00m にわたって西パロドスの壁の

一部が切れ、石灰岩製の石材で舗装された床のようなものが見えている部分で、床面高さ 5.855m である。3 箇所目は、東後壁の南端部に設けられている斜路である。この斜路は、オルケストラ中心から 33.45 ～ 38.49m の位置で北へ曲がっていることから、曲がった先に周回通路があった可能性が高い。以上より、高さ 9.037m 前後、オルケストラ中心から 33.5m 付近に周回通路があったと考えられる。

この周回通路とは別に、さらに標高が高い位置にもう一本周回通路があったと考えられる。後壁に設けられた階段を見てみると、各階段前の街路標高が異なる。最も標高が低いのは東側中階段前で、高さ 9.453m である。これと座席西中腹の石灰岩材列の高さ 9.037m とを比較すると、東側中階段前の街路標高が 0.416m 高い。つまり、東側中階段を上ると石灰岩材列より高い位置に出ることになる。他の階段も同様に、階段前の街路の標高が前述の石灰岩材列より高い。したがって、高さ 9.037m の周回通路よりさらに高い位置にもう 1 本周回通路があり、そこへ各階段が接続していたと考えられる。

以上より、本劇場には、2 本の周回通路があり、客席全体を 3 層に分けていたと考えられる。以下、2 本の周回通路を下部周回通路、上部周回通路とし、客席各層を下層から順に第 1 層、第 2 層、第 3 層とする。次節以降、客席各層の詳細な復元分析をおこなう。

5-2. 客席第 1 層の復元

1) 下部周回通路の復元

周回通路の幅と後背部の壁の高さは明らかでないが、メッセネの劇場と同規模でギリシアにある、エピダウロス、アルゴス、メガロポリス、スパルタの劇場の例から、下部周回通路は、通路幅 1 ～ 2m、通路の後背壁の高さ 1 ～ 1.5m 程度、後背壁の幅 1.2m 前後であったと推測される¹⁴⁾。本稿では、下部周回通路の寸法が、劇場の規模がほぼ同じで、かつ建物全体の残りがよいエピダウロスの劇場の周回通路の寸法、幅 1.830m、後背部の壁の高さ 1.350m、後背壁の奥行き 1.210m を用い、推定復元をおこなう。また、周回通路前方には客席最上段の座席が置かれ、通路幅は座席後端部から通路後背壁前面までの幅とする。

下部周回通路があった位置は、前節のとおり、オルケストラ中心から約 33.5m の地点であったと考えられる。この付近で出土した遺構は、客席西中腹の石材列、西パロドスの壁中腹の石灰岩、東後壁南端部の斜路が北へ曲がる地点にあるポロス材列である。これらのうち、客席西中腹の石材列が最も標高が高い位置で出土しており、その高さ 9.037m 付近に下部周回通路があったと考えられる。客席西中腹の石材列を見てみると、石灰岩材列の上部にポロス材列が載っている。このことから、石灰岩材列が下部周回通路床面の仕上げ材でポロス材列が通路後背部の壁の基礎部材であったか、石灰岩材列が座席の仕上げ材でポロス材列が下部周回通路の基礎部材であった可能性が示唆される。

石灰岩材列が客席の仕上げ材でポロス材列が下部周回通路の基礎部材であった場合、ポロス材列の前面が下部周回通路前面にあたり、オルケストラ中心から通路前面までの水平距離は 33.710m となる。これは、西パロドスの途中にある床のような石灰岩列の位置（オルケストラ中心から 31.76～35.25m）や東後壁南端部の斜路が北へ折れ曲がる位置（オルケストラ中心からの水平距離 33.45～38.49m）と矛盾しない¹⁵⁾。したがって、客席西中腹の石材列のうち下段の石灰岩材列は座席の仕上げ材、上段のポロス材列は下部周回通路の基礎部

材だったと判断する。

ここで、下部周回通路の前方には座席があり、基礎となっていたポロス材列の上面と前面には石灰岩の板材を貼って仕上げ面としていたと考えられるため、それを踏まえて通路の正確な位置を推定復元する。客席 2、3 段目に使用されている、板石を水平垂直に組み合わせた座席の部材寸法をもとに、下部周回通路前方座席は奥行き 0.360m、座面の板材は高さ 0.140m、座席前面に貼られた仕上げ材は厚さ 0.070m とする（図 9b）。また、通路床面は座席上面より 0.070m 低かったとして、下部周回通路の床面は高さ 9.507m、通路前方の座席は高さ 9.577m の位置にあったと復元する。オルケストラ中心から下部周回通路前面までの水平距離は、33.990m となる。

2) 客席第 1 層の座席勾配の復元

客席第 1 層の座席勾配の復元にあたっては、まず前項で復元した下部周回通路の位置から勾配を算出する。続いて、パロドスを構成した壁部材、笠木部材、階段通路の蹴上と踏み面の寸法値をもとに勾配を計算する。最後に、これらを比較して復元勾配を決定する。

前述のとおり、客席西中腹の石灰岩材列が客席第 1 層の上から 2 段目の座席にあたると考えられ、その上面後端は高さ 9.037m、オルケストラ中心からの水平距離 33.640m の位置にあったと推測される。これは、下部周回通路前方の座席の前面下端の位置となる。一方、客席最下段を見ると、エウリポス外縁に沿ったポロス材の座席が置かれ、その横に階段通路の 1 段目が設置されている。階段 2 段目の前面下端は座席 2 段目の足置き位置にあたり、高さ 0.540m、オルケストラ中心からの水平距離 12.374m である。階段 2 段目の前面下端から下部周回通路前面下端までの水平距離は 33.640-12.374=21.266m で、両者間の高低差は 9.037-0.540=8.497m、両者を結んだ斜辺の傾斜角は $\tan^{-1}(8.497/21.266)=21.78$ 度となる。

東西パロドスの壁部材のうち、上面が斜めに切られた壁部材 2 個の上面の傾斜を計測したところ、21.1 度と 22.1 度で、平均 21.6 度であった。また、パロドスの頂部に置かれた笠木部材 7 個の、隣接する部材との接合面に対する上面の傾きを実測したところ、最小 19.1 度、最大 23.0 度、平均 21.4 度であった（表 1）。

階段通路は、現在残っている 10 本の階段通路のうち、計測が可能だったのは 8 本で、段数にして 65 段であった。計測の結果、蹴上は平均 0.142m（最小 0.097m 最大 0.220m）、踏み面は平均 0.364m（最小 0.290m 最大 0.460m）であった。これらの計測結果から階段状通路の勾配を算出すると、最小 13.59 度、最大 32.45 度、平均蹴上・平均踏み面から計算した勾配は 21.31 度となる。

以上より、パロドス壁部材上面の傾斜が平均 21.6 度、パロドスの笠木部材の傾斜が平均 21.4 度、階段通路の勾配が平均 21.31 度という結果が得られた。これらは、下部周回通路前方の座席前面下端と階段通路 2 段目前面下端を結んだ斜辺の傾斜角 21.78 度と大差ない。したがって、客席第 1 層の階段通路および座席は、勾配 21.78 度で積まれたとする。

3) 客席第 1 層の座席および階段通路の復元

客席第 1 層の座席は、ポロス材の座席と 2 枚の板石を水平垂直に組み合わせた座席との 2 種類があったと考えられる（図 9a、b）。最下

表 1 笠木上面の傾斜

部材番号	傾斜（度）
T44	22.2
	21.0
T66	19.1
	23.0
45	21.8
	22.7
T46	21.3
	21.6
T62	19.6
平均	21.4

部でオルケストラと接する部分には、エウリボスのすぐ外側にポロス材の座席が置かれていた。座席2～4段目には、現在も座席の一部が残っており、加えて、客席西中腹の石灰岩材列が上から2段目の座席上面の板石にあたと推測されることから、客席第1層では座席2段目から最上段まで、石灰岩製の板石を水平垂直に配置する座席が使用されたと考えられる(図8上)。客席第1層の上から2段目の座席の奥行きは、客席西中腹の石灰岩材列前面から復元した下部周回通路前面までの奥行きに等しく、0.730mとなる。座面の板石は、その下部に垂直に置かれた板石より前へ出ていると考えられる。どれくらい出ていたかは不明であるが、本稿では、高さ座面幅ともに0.35mの石灰岩製座席部材の前面に施された帯装飾の平均高さと同じ0.022m出ていたとする。すると、垂直に置かれた石材前面から座席後端までの奥行きは $0.730-0.022=0.708\text{m}$ となる。一般に、座席1段につき階段通路の階段2段が設置されることから、階段2段分の踏み面を足したものが0.708mと考えると、階段1段分の踏み面は $0.708/2=0.354\text{m}$ となる。踏み面0.354mの階段を勾配21.78度で積む場合、階段1段分の蹴上は、 $0.354\times\tan 21.78^\circ \approx 0.141\text{m}$ となる。この結果を、遺構の実測値から算出した平均値と比較すると、蹴上の現状平均0.141mとの誤差は0.00m、踏み面の現状平均0.364mとの誤差は0.010mである。

階段通路の2段目以降の階段が、すべて蹴上0.141m 踏み面0.354mであった場合、階段通路の階段2段目の前面下端から下部周回通路前方の座席前面下端までの間に、 $8.497/0.141=60$ 段余り0.037m、 $21.266/0.354=60$ 段余り0.026mより、60段入る。しかし、階段がここへ奇数段入らなければ客席1段あたりに階段が2段ずつおさまらないため、階段通路の階段2段目前面下端から下部周回通路前方の座席前面下端までの間に59段の階段が入っていたとする。59段のうち最上段2段分は、客席西中腹の石灰岩材列の奥行きから計算した蹴上0.141m 踏み面0.354mとし、残り57段分の蹴上と踏み面を再計算し、蹴上 $(8.497-0.141\times 2)/57=0.144\text{m}$ 、踏み面 $(21.266-0.354\times 2)/57=0.361\text{m}$ とする。これらと遺構の実測値より算出した平均値とを比較すると、蹴上の現状平均0.141mとの誤差は0.003m、踏み面の現状平均0.364mとの誤差は0.003mである。本稿では、便宜的に一定の蹴上と踏み面をもって階段通路を復元する。また、階段通路の最上段2段分は、客席西中腹のポロス材列の高さ0.400mに復元した床材の厚さ0.070mを足した0.470mを階段2段分の蹴上とし、蹴上 $0.470/2=0.235\text{m}$ 、踏み面は0.350mとした。階段通路は合計62段、座席は31段あったと復元される。

階段通路の位置は、オルケストラ周辺に残る階段通路の痕跡より、第1層には合計10本の階段通路があり、客席は11クネイに分割される。客席の両南端に、階段通路はない。通常、階段通路は、オルケストラの中心に向かって放射状に配置されるが、現状では各階段の延長状にオルケストラの中心がない。本稿では、現状の各階段通路の軌道を延長して復元をおこなう。

5-3. 客席第2層、第3層の復元

1) 上部周回通路の復元

上部周回通路は、下部周回通路と同じ幅1.830m、後背壁の高さ1.350m、後背壁の幅1.210mとして復元をおこなう。

上部周回通路は、東西後壁に取り付けられた6本の階段(西側北階段、西側中階段、西側南階段、東側北階段、東側中階段、東側

南階段)を通り、東西後壁外側の街路から出入りするようになっていたと考えられる。前述の6本の階段のうち、現状で最も標高が高いところまで階段が残っているのは西側北階段で、最上段は高さ16.299m、2番目が西側中階段で、最上段は高さ14.600mである。このどちらかが、上部周回通路の床面と同じ高さであったと仮定する。

西側北階段の最上段の高さが上部周回通路の床面標高であったとすると、上部周回通路は高さ16.299m以上の地点にあったと言える。高さ16.299mまで他の階段を積んでいったとき、西側南階段がオルケストラ中心から最も近い位置で高さ16.299mに達し、この時、オルケストラ中心から階段最上段後端までの水平距離は45.796mとなる。西側南階段の最上段後端を上部周回通路後端とすると、上部周回通路前面から下部周回通路の後背壁上面後端までの水平距離が $(45.796-1.830)-(35.820+1.210)=6.930\text{m}$ 、上部周回通路床面と下部周回通路後背壁上面との高低差が $347.950-342.538=5.412\text{m}$ となり、座席勾配は $\tan^{-1}(5.412/6.930)=37.99$ 度となるが、これは客席勾配としては急すぎる¹⁶⁾。そのため、上部周回通路が西側北階段の最高段と同じ高さ16.299mにあったとは考えにくい。

次に、2番目に高い位置まで階段が残っている西側中階段の最上段の高さ14.600mを、上部周回通路の床面標高と仮定する。西側北階段は、すでに高さ16.299mまで階段があるため、下り階段を設けなければ上部周回通路へ接続することができないが、基本的にすべての階段が上り階段のみで通路へ接続したと考えられるので、西側北階段は上部周回通路より高い位置で客席に接続していたと推測される。西側北階段以外の各階段を高さ14.600mまで積むと、オルケストラ中心から最も近い位置でこの高さへ到達するのが西側南階段で、オルケストラ中心から階段最上段前面までの水平距離が

図8 座席詳細復元断面図

左上; 最下段付近の座席、右上; 客席第1層最後部、下部周回通路、客席第2層最下部の座席
左下; 最下段付近の階段、右上; 客席第1層最後部、下部周回通路、客席第2層最下部の階段

図9 3種類の座席構成

a; ポロス材の座席、b; 2枚の板石を水平垂直に組み合わせた座席、
c; 幅高さ0.35mの石灰岩製部材と板石を組み合わせた座席

48.232m となる。上部周回通路前面から下部周回通路後背壁の上面後端までの水平距離は $(48.232-1.830)-37.030=9.372\text{m}$ 、両者の高低差は $14.600-10.887=3.713\text{m}$ となる。これらの値より、座席勾配は $\tan^{-1}(3.713/9.372)=21.61$ 度と算出され、客席第1層の座席勾配とほぼ等しい値となる。したがって、上部周回通路の床面標高は西側中階段の最上段の高さ 14.600m と同じと判断する。

西側中階段は、オルケストラ中心から階段最上段後端までの水平距離が 51.140m であるので、 $51.140-48.232=2.908\text{m}$ より、階段の最上段から通路までに長さ 2.908m の水平通路を設けることで上部周回通路へ出ることとする。この階段以外では、東側北階段がオルケストラ中心から 50.920m の位置で高さ 14.600m に達するため、2.674m の水平通路を設ける必要がある。東側中階段はオルケストラ中心から 48.412m、東側南階段はオルケストラ中心から 48.762m の位置で高さ 14.600m に達するため、それぞれに 0.018m と 0.530m の水平通路を設ける必要があるが、これは通路というよりは階段の踏み面に相当すると言える。

2) 客席第2層の座席勾配の復元

客席第2層の客席の勾配は、下部周回通路と上部周回通路との距離と高さより復元値を算出する。前項で述べたとおり、上部周回通路前面から下部周回通路後背壁の上面後端までの水平距離は 9.372m、両者の高低差は 3.713m より、座席勾配は $\tan^{-1}(3.713/9.372)=21.61$ 度と算出される。この値は、客席第1層の勾配 21.78 度と比べるとやや緩やかだがほぼ同値であるため、第1層の勾配に合わせて第2層の勾配も 21.78 度として復元をおこなう。客席第3層の勾配は、客席最後部の標高が不明なため、客席第1層、第2層の勾配と同じく 21.78 度として復元をおこなう。これに伴い、上部周回通路の寸法を再計算し、復元をおこなう。

3) 客席第2層の階段通路および座席の復元

客席第2層の階段通路は、現在痕跡が全く残っていないため、その配置については類例を参照して復元せざるをえない。階段通路の配置に関しては、3層構成の劇場で階段の数が上層と下層で異なる場合、客席第1層の階段通路の数に比べ客席第2、3層の階段通路の数が2倍になる例(例:アテネのディオニソス劇場)と、客席第1、2層の階段通路の数が同じで第3層の階段通路の数が2倍になる例(例:エフェソスの劇場)がある¹⁷⁾。本稿では、客席第2層の階段通路は第1層の階段通路と同数であったとする。

客席第2層の座席は、高さ 0.358m 幅 0.350m の石灰岩製の部材を座面に使用し、足置きに板材を使用したと考えられる(図9c)。これは、この種の座席部材が、客席があった斜面中腹で出土したためである(図1)。座席1段分の幅は座面幅の2倍と考え、 $0.350 \times 2 = 0.700\text{m}$ とする。通常、座席1段分の奥行きが階段通路の踏み面2段分となるので、階段の踏み面は $0.700/2 = 0.350\text{m}$ となる。踏み面 0.350m の階段を勾配 21.78 度で積むとき、蹴上は $0.350 \times \tan 21.78^\circ = 0.1398\text{m}$ となる。客席第2層には、蹴上約 0.140m 踏み面 0.350m の階段が、 $3.713/0.1398=26$ 余り 0.078m、 $9.368/0.350=26$ 余り 0.272m より、26段あり、最上段のみ蹴上 0.218m とし、上部周回通路の前面を 0.272m 前へ出し通路幅を $1.830+0.272=2.102\text{m}$ とすることで調整する。客席第2層には、座席が $26/2=13$ 段あったと復元される。

4) 客席第3層の階段通路、客席および最後部通路の復元

第3層の階段通路は、後壁の階段が客席第1層の2本の階段通路

のほぼ中間に位置するため、第2層の階段通路の延長線上および2本の階段の中央に配置されたとする。ただし、西側中階段、西側南階段、東側北階段のある位置については、階段通路はなかったと考えられる。東側中階段以南は後壁が約 3.9m オルケストラに近づいて造られているため、この部分に客席第3層の座席はなかったと考えられる。以上より、客席第3層は、12本の階段通路と4本の階段により16クネイに分割されていたとする。後壁南部のみがオルケストラに近い理由は不明だが、後壁外側の街路や街路を挟んで隣接するアルシノエの泉の建物と関連する可能性がある。階段通路は、客席第2層と同じ蹴上 0.1398m 踏み面 0.350m で積まれたとする。

西後壁に設けられた北大階段は、客席最後部に接続していたと考えられるため、客席最後部にも通路があると考えられる。現在、北側大階段は西後壁から外部へ突出する形で下部が全長 8.64m 幅 2.58m にわたって残っている。階段は最下段から4段目まで残っており、このうち残りがよい3段を計測したところ、平均蹴上 0.268m (最小 0.255m、最大 0.285m) 踏み面は全段 0.360m であった。水平距離 8.64m にわたって蹴上 0.268m 踏み面 0.360m の階段が積まれた場合、 $8.64/0.360=24$ より、劇場内に入るまでに25段の階段があったと考えられる。さらに、厚さ 1.4m の後壁内を通り劇場最後部へ出るまでに階段があったとすると、 $1.40/0.360=3$ 段余り 0.320m より、先述の25段に4段の階段が加えられ、合計29段の階段があったと推算される。階段3段目までを現状の蹴上で積み、4段目以降を蹴上 0.268m で積むと、北側大階段全段を合計した高さは $0.255+0.265+0.285+0.268 \times 26 = 7.773\text{m}$ となる。階段前の地表面が高さ 14.720m であることから、北大階段の最上段の高さは $14.720+7.773=22.493\text{m}$ と復元される。

客席第3層の座席は、客席第2層と同様に高さ 0.358m、幅 0.350m の石灰岩部材と幅 0.350m の板石とを組み合わせて構成したと考えられる(図9c)。また、上部周回通路の後背壁が 1.380m 立ち上がり、後背壁の幅が 1.210m とすると、客席第3層最前列の座席の足置き前面下端は、高さ $14.600+1.380=15.980\text{m}$ 、オルケストラ中心からの水平距離 $48.232+1.210=49.442\text{m}$ の位置にあったということになる。階段通路の最上段が前述の北大階段の最上段の標高と同じ標高であったとすると、最後部通路床面と上部周回通路後背壁上面との高低差は $22.493-15.980=6.513\text{m}$ で、 $6.513/0.1398=46$ 段余り 0.082m より、46段の階段があったとする。踏み面 0.350m の階段を46段積むと、オルケストラ中心から階段通路最高段前面までの水平距離は $49.442+(0.350 \times 45)=65.192\text{m}$ となる。客席第3層には、座席が $46/2=23$ 段あり、客席最後部通路は最大幅約 7m の踊り場状の場所であったと推定される。

5-4. 東西パロドスの復元

1) 東パロドスの復元

第3章で述べたとおり、東パロドスの壁のすぐ南には舞台収納庫の石灰岩で作られた壁があり、両者の間には大小の石材が充填されている。この壁は舞台収納庫の北壁にあたり、南壁は基礎部のみ残っている。これらのことから、後1世紀から後3世紀までの最終段階で外部に露出していたのは、舞台収納庫の壁であったと考えられる。

壁上部には、劇場東側からの主要な通路があり、上部座席を支える壁が設けられている。この部分は斜路となっており、下部周回通路へ出入りすることができる。斜路の現状の高さ 5.997m と下部

図 10 劇場客席の平面、断面復元試案

周回通路床面の復元高さ 9.507m との高低差が $5.997 - 9.507 = 3.510\text{m}$ あるので、斜路と周回通路との間に階段を設けたと考えられる。この階段は、北大階段と同じく蹴上 0.268m 踏み面 0.360m とし、 $3.510 / 0.268 = 13$ 余 0.026m より、合計 13 段あったと推定する。

2) 西パロドスの復元

西パロドスの壁は、ヘレニズム期の壁の痕跡が残っているが、ローマ時代には舞台建物と壁は平行であったと考えられる。壁東部では石灰岩材が積まれた壁の後ろにポロス材の列が見つかったことから、ヘレニズム期の壁の部材を一部再利用して壁を構成していると推測される。

壁の西端部には、東パロドス壁東端部と同じく階段が一部残っていることから、劇場南西部からの主要な出入口となっていたと考えられる。おそらく、東パロドスと同様に階段から続く通路があり、下部周回通路へ接続していたと考えられる。西パロドスの壁が一部切れ、床面が露出している部分は、おそらく劇場南西部から下部周回通路へ出入りするための通路の一部であったと考えられる。

6. 結論

以上、メッセネの劇場の客席部の現状を報告し、ローマ時代における客席部の復元試案を提示した(図 10)。

前章で提示した復元案は客席第 2、3 層の座席勾配や上部周回通路の位置、各周回通路の幅や後背壁の高さなどは、それらを直接特定できる遺構が残っていないために推測の域を超えないが、客席が 3 層構成で、2 本の周回通路が存在した可能性は極めて高い。また、

客席第 1 層の階段通路が 10 本で客席が 11 クネイに分割されていたことは、遺構の現状より確実と言える。座席は 3 種類あり、中にはおそらくヘレニズム期に使用されていた部材が含まれていた。座席以外にも、ローマ時代のパロドスの壁は、部分的にヘレニズム期のパロドスの壁の部材を再利用していることがわかった。また、遺構の現状から各周回通路へ別々の出入口が設けられていたことが判明している。これは、傾斜地に建設された劇場としては一般的で、アテネのディオニソス劇場やエピダウロスの劇場にも見られる¹⁸⁾。

客席勾配に関しては、現状に残る客席西中腹の石材列などの遺構の位置座標から復元した客席勾配が 21.78 度、階段通路やパロドス壁の壁部材上面と笠木部材接合面の傾斜から予想される客席勾配がおよそ 21 ~ 22 度であったことから、前稿の問題点であった出土部材の勾配と座席の復元勾配との矛盾が解消された。客席勾配 21~22 度という値は、野口・渡邊氏が劇場の建設年代別に客席勾配を算出した結果、ギリシア時代は平均 26.0 度、ヘレニズム時代は平均 26.9 度、ローマ帝政期は平均 28.6 度としているが、これらと比較するとかなり緩やかである¹⁹⁾。その要因として、メッセネの劇場が建てられた斜面の傾斜が緩やかであったことが考えられる。そして、おそらくローマ劇場に改築する際にも、少なくとも第 1 層は勾配の変更をしなかった可能性が高い。

今後の課題は、劇場建物各部の年代検証をおこなうことであるが、これはテメリス氏による発掘結果の発表を待つ必要があるだろう。

謝辞

本研究は、平成 21 ～ 24 年度日本学術振興科学研究費基盤 (S) 課題番号：20226012) (研究代表者：伊藤重剛) の助成を得た。記して謝意を表する。

注

- 1) メッセネの遺跡は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、Th. ソフリス氏、G. オイコノモス氏により発掘がおこなわれた。その後、1957 年から 1974 年にかけて、考古学者のオルランドス氏の指揮下で長期にわたる発掘がおこなわれたが、最終的な発掘報告書は発行されていない。それ以降しばらくは発掘がおこなわれていなかったが、1987 年からメッセネ考古学協会による大規模な発掘が開始され、スタディオンの、アスクレピウス神域、劇場、アゴラなどの大規模な公共施設の遺構が出土しており、現在も継続して調査がおこなわれている。P. Themelis: Η Αρχαία Μεσσήνη, Αθήνα, p. 20, 2002 (The Ancient Messene in Greece), Th. Sophoulis: Prakt, p. 27, 1895; AM, p. 375, 1895; AA, p. 73, pp. 453-454, 1896 G. Oikonomos: Prakt, pp. 201-205, 1909; pp. 55-66, 1925; BCH, pp. 453-454, 1925, A. K. Orlandos: Report of Excavation, Ergon, pp. 143-148; 1960, pp. 110-117; 1961, 159-166; 1963, pp. 119-125; 1964, pp. 88-102, 1959; pp. 90-101, 1965; pp. 97-132, 1970; pp. 67-81, 1973; pp. 79-82, 1974
- 2) 劇場の発掘報告は、以下の年報を参照。P. Themelis: Prakt, pp. 73-79, Euk. 1-4, Πiv. 64α-65β, 1987; pp. 45-52, Euk. 1-5, Πiv. 34-38β, 1988; p. 91, Euk. 21-22, Πiv. 70β-71β, 1989; pp. 153-156, Euk. 5, Πiv. 62β-65β, 1996; pp. 85-89, Euk. 3, Πiv.38-43β, 1997; pp. 102-106, Πiv. 42α-50β, 1998; pp. 76-81, Euk. 3-4, Πiv. 48β-51β, 1999; pp. 76-82, Euk. 1, Πiv. 41α-47γ, 2000; 2001; pp. 22-34, 2002; pp. 26-28, 2003; pp. 28-29, 2004; pp. 39-48, 2005; pp. 32-43, 2006
- 3) 熊本大学によるメッセネの劇場の調査報告は、以下の通り。大塚和樹, 伊藤重剛, 吉武隆一, 岩田千穂: 地中海古代都市の研究 (136) 古代都市メッセネにおける劇場の客席の復元に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告, 51 号 3, pp.769-772, 2012 年 3 月; 吉武隆一, 伊藤重剛, 岩田千穂: 地中海古代都市の研究 (133) メッセネにおける劇場調査報告 2010(1) スカエナエ・フロンスの柱頭, 日本建築学会九州支部研究報告, 50 号 3, pp.637-640, 2011 年 3 月; 岩田千穂, 吉武隆一, 伊藤重剛: 地中海古代都市の研究 (134) メッセネにおける劇場調査報告 2010(2) ローマ時代スケエネの復元試案, 日本建築学会九州支部研究報告, 50 号 3, pp.641-644, 2011 年 3 月; 吉武隆一, 伊藤重剛, 岩田千穂ほか: 地中海古代都市の研究 (128) メッセネにおける劇場調査報告 2009(1) 平面, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 49 号 3 (計画系), pp.585-588, 2010 年 3 月; ソクンティ・セイン, 吉武隆一, 伊藤重剛, 岩田千穂ほか: 地中海古代都市の研究 (129) メッセネにおける劇場調査報告 2009(2) スケエネ, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 49 号 3 (計画系), pp.589-592, 2010 年 3 月; 岩田千穂, 伊藤重剛, 吉武隆一ほか: 地中海古代都市の研究 (130) メッセネにおける劇場調査報告 2009(3) スケエネ部材, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 49 号 3 (計画系), pp.593-596, 2010 年 3 月; 谷皓司, 伊藤重剛ほか: 地中海古代都市の研究 (123) 古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(1) 概要, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 48 号 (計画系), pp.773-776, 2009 年 3 月; 中之丸論志, 伊藤重剛ほか: 地中海古代都市の研究 (124) 古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(2) 出土部材, 日本建築学会九州支部研究報告, 第 48 号 (計画系), pp.777-780, 2009 年 3 月
- 4) エピダウロスの劇場は、現状分析をもとに、平面、断面から詳細に至るまで、精緻に復元がおこなわれている。Gerkan, Armin von and Mueller-Wiener, Wolfgang: Das Theater von Epidauros, Stuttgart, 1961
- 5) 客席部の各部名称については、以下のとおりとする。客席はいわゆる *cavea* の部分、座席はその内の一段分を指す。エウロポスは、オルケストラの外縁に沿って設けられた溝である。客席の円弧に沿って水平に回る通路を周回通路、上下に移動するために客席内に設けられた階段を階段通路とする。周回通路は、ギリシア劇場において *diazoma*、ローマ劇場において *praecinctio* と呼ばれる。客席のうち、周回通路と階段通路とに挟まれた楔型の一角を、クネイ *cunei* と呼ぶ。パロドスの壁は、一般に *analemmata* と呼ばれる部分で、客席の端部を支え、同時にパロドスに面する壁となる。
- 6) 劇場の発掘成果をまとめた中間報告書は以下の通り。P. Themelis: Το Αρχαίο Θέατρο της Μεσσήνης Αρχαιολογική Τεκμηρίωση, Αθήνα, 2008 (P. テメリス, メッセネの劇場の考古学的検証)。
- 7) テメリス氏は、メッセネの劇場のローマ時代の舞台建物は後 2 ～ 3 世紀に建設されたとしているが、吉武氏により舞台建物のスカエナエ・フロンスに使用された部材の建築装飾の様式分析がおこなわれたところ、後 1 世紀の特徴を備えていることなどから、舞台建物の建設は後 1 世紀におこなわれたことが明らかになった。吉武隆一: 古代都市メッセネの劇場のスカエナ

エ・フロンスにおける建築装飾の様式分析および建設年代, 日本建築学会計画系論文集, 第 78 巻, 第 684 号, pp. 485-495, 2013 年 2 月

- 8) 岩田千穂, 吉武隆一, 伊藤重剛: ギリシア古代都市メッセネにおける劇場のローマ時代舞台建物の復元試案, 日本建築学会計画系論文集, 第 77 巻第 678 号, pp.1967-1976, 2012 年 8 月; 吉武隆一: 古代都市メッセネの劇場におけるスカエナエ・フロンスの新たな復元案, 日本建築学会計画系論文集, 第 78 巻, 第 691 号, pp. 2055-2065, 2013 年 9 月
- 9) 大塚和樹, 伊藤重剛, 吉武隆一, 岩田千穂: 前掲書, pp.769-772, 2012 年 3 月
- 10) シアー氏は、多色彩大理石板によるオルケストラ床面の舗装は、アウグストゥス帝の頃からはじまったとしている。また、オプス・セクティル (*opus sectile*) によるオルケストラの舗装はアテネのディオニソス劇場でネロ帝の頃 (後 54-58)、コリントの劇場でハドリアヌス帝の頃 (後 117-138) におこなわれている。F. Sear: Roman Theatres, Oxford, pp.80-81, 2006
- 11) 本稿では、エウロポス外縁の円弧を延長した円の中心を、オルケストラの中心としている。10 本の階段通路のうち西にある 2 本の延長線がオルケストラの中心に一致しないことは、これらの階段通路が造られた年代が、他の 8 本が造られた年代と異なる可能性を示唆する。
- 12) ディルケ氏は、座席を部材構成により分類した。石造の座席は、一般型と節約型に分けられる。一般型は、座面と足置きが単一部材で作られるもので、エピダウロスの劇場で見ることができる。節約型は、一般型をもとに複数の部材を組み合わせるにより構成するものである。ディルケ氏は、節約型をさらにアルゴス型、デロス型、エレクトリア型、メガロポリス型に細分している。O.A.W. Dilke: The Greek Theatre Cavea, BSA, No. 43, pp. 153-162, 1948
- 13) メッセネのエクレシアステリオンは、前 2 世紀半ば以前に建てられたとされている。P. Birtachas: Το Ωδείο και το Ανατολικό Πρόστυλο του Ασκληπείου, pp. 93-94, 2008. メッセネで座席を有する遺構は劇場のほかにスタディオンとアスクレピオス神域のエクレシアステリオンとがある。スタディオンの座席は、高さ 0.400m、座席部材のみの高さは 0.355m、奥行き 0.735m、で、足置きが座面よりも 0.095m 低くなっている。また、エクレシアステリオンの座席は、高さ 0.340m、座席部材のみの高さ 0.360m、奥行き 0.680m で、足置きが座面よりも 0.020m 低くなっている。P. Birtachas: op. cit, p. 86; σχέδιο 13.
- 14) アルゴスの劇場の上部周回通路が幅 1.98m、壁の高さ 1.35m、エピダウロスの劇場の周回通路が幅 1.9 ～ 2.0m、壁の高さ 1.38m、デロスの劇場の周回通路が幅 1.5m、壁の高さ 1.17m である。Gerkan, Armin von and Mueller-Wiener, Wolfgang: op. cit, tafel 9, 1961; O. W. Dilke: Details and Chronology of Greek Theatre Caveas, BSA, No. 45, pp. 40-44, 1950
- 15) 石灰岩材列が下部周回通路床面の仕上げ材であった場合、下部周回通路の後端がオルケストラ中心からの水平距離 33.710m の位置にあり、通路前面は、座席幅 0.350m と通路幅 1.830m を引き、オルケストラ中心から 31.88m の位置にあったということになる。これは、西パロドスの途中にある床のような石灰岩列の位置 (オルケストラ中心から 31.76～35.25m) とは近いが、東後壁南端部の斜路が北へ折れ曲がる部分の位置 (オルケストラ中心からの水平距離 33.45～38.49m) と約 2m ずれるため、石灰岩材列が下部周回通路の仕上げ部材であったとは考えにくい。
- 16) 野口・渡邊氏によると、客席の傾斜はローマ帝政期の劇場 80 例で平均 28.6 度である。野口力, 渡邊道治: ギリシア・ローマ劇場の客席に関する特徴について, 日本建築学会九州支部研究報告 50 号 3, pp.609-612, 2011 年 3 月
- 17) 野口・渡邊氏は、客席の上下層間のクネイ数の関係を分析しており、3 層構成の劇場において客席第 2 層のクネイ数が第 1 層のクネイ数と同数となるものが 11 例、第 3 層のクネイ数が第 2 層のクネイ数の 2 倍となるものが 5 例存在するとしている。野口力, 渡邊道治: ギリシア・ローマ劇場の客席の階段状通路の配置について, 日本建築学会九州支部研究報告 51 号 3, pp.781-784, 2012 年 3 月
- 18) エピダウロスやメガロポリスの劇場では、同じように、外部から直接下部周回通路へ出入りすることができる。E. A. Gardner, W. Loring, G. C. Richards, W. J. Woodhouse: The Theatre at Megalopolis, JSH, 11, pp. 294-298, 1890; Armin von and Mueller-Wiener, Wolfgang: op. cit, tafel 9
- 19) 野口力, 渡邊道治: 前掲論文, pp.609-612

図版出典

- 写真 1 メッセネ考古学協会撮影
写真 2,4,5 伊藤撮影
写真 3 岩田撮影
図 1 メッセネ考古学協作成
図 2 ～ 7 熊本大学ギリシア古代建築調査団作成
図 8 ～ 10 岩田作成

(2013 年 6 月 24 日原稿受理, 2013 年 12 月 4 日採用決定)